

日本語母語話者と中国人日本語学習者における 接続表現の省略に関する対照研究

範 海 翔

Abstract

This paper utilizes two types of surveys (A and B) conducted by Ichikawa (1978) to assess ellipsis of the conjunctive expressions of Chinese learners of the Japanese language. The results of the Ichikawa surveys are compared to the results of a survey of ellipsis in the conjunctive expressions of Japanese native speakers conducted by Sakuma (1992), and the results of both are juxtaposed. First, no salient difference between Japanese native speakers and Chinese learners of the Japanese language was discovered regarding ellipsis in contexts composed of just two sentences. However, in the contexts composed of multiple sentences found in survey B, there was a conspicuous asymmetry between both groups. Although the frequency of ellipsis in the writing of Japanese native speakers was low only in adversative relationships, the frequency of ellipsis in the writing of Chinese learners of the Japanese language was low in not only inverse relationships, but also copulative relationships, and conversion relationships. One of the characteristics of texts conjoined by many sentences is contextual complexity, but because Japanese native speakers inherently understand the contextual flow of natural Japanese, they are able to freely elide and supplement conjunctive expressions while maintaining the clarity of a composition. Conversely, because Chinese learners of the Japanese language do not have the sufficient grasp of the contextual nuance possessed by native Japanese writers, they place special emphasis on the logic of the composition and place many conjunctive expressions in their writing. There is heterogeneity between both groups in this regard.

キーワード……日本語母語話者 中国人日本語学習者 接続表現 省略

0 はじめに

筆者は前稿範(2010)において、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文コーパスに用いられる接続表現について調査し、両者の文章における接続表現の使用上の諸特徴を明らかにした。特徴の一つは、日本語母語話者より中国人日本語学習者のほうが接続表現を多用すること

である。学習者の接続表現における多用のことは多くの先行研究で指摘されている。例えば日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現使用量を調査した黒岩(1994)、浅井(2003)、田代(2007)などである。だが、これらの研究では日本語学習者の作文における接続表現の多用の要因についての指摘は見られなかった。日本語学習者の接続表現の多用に関して、範(2010: 13)は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文に用いられる接続表現の使用特徴を関連づけながら、中国人日本語学習者の接続表現の使用量は日本語母語話者のそれより上回っている要因を3つにまとめている。つまり、学習者は接続表現を運用する時「①使ってはいけない場合に接続表現を使ってしまう。②省略してもいい場合に省略しない。③文脈展開の様式特徴から生じる多用」の3つが見られる。以上の範(2010)で明らかにしている日本語学習者の接続表現における多用の諸要因はあくまで日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用上の特徴からまとめてきたもので、さらに検証する必要があると考えている。

ところで、この3つの要因はそれぞれ誤用、省略、文章構造の3つの面の問題に関わっている。研究の複雑化を避けるため、また本稿は主に日本語母語話者と学習者の作文における文と文のつながり表現の両者における特徴を中心に論じるもので、要因①のような誤用に関する多用ならびに③のような文章構造に関する多用は、今回の研究から除外することにする。②のような単純な文と文のつながりにおける接続表現の省略問題を限って取り扱うことにする。

日本語母語話者の接続表現における省略状況に関しては市川(1978)、佐久間(1992)、馬場(2009)などの研究によって明らかにされている。その中で、市川(1978)の日本語母語話者に対する接続表現の省略意識に用いられる2種の【調査A・B】は多くの先行研究に引用されている。本稿はこの2種の【調査A・B】をそのまま利用し、中国人日本語学習者を対象に調査を実施する。今回の調査結果の集計によって中国人日本語学習者の接続表現の省略状況が明らかになる。さらに、先行研究で明らかにされている日本語母語話者の結果と比べ、両者の相違点またそれぞれの特徴をまとめたい。最後に、日本語母語話者と中国人日本語学習者との相違点を生み出す要因を分析する。日本語学習者に日本語における接続表現の省略の手本を示したいと思う。

1 先行研究

市川(1978: 70-80)は「どういう接続語句は省略しやすく、どういう接続語句は省略しにくい、あるいは、どういう場合は接続語句を必要とし、どういう場合は必ずしも必要としないか。」という問題について、客観的に分析する手がかりを得るために、A、Bの二種の調査を行った。【調査A】では、各種の文脈のモデルについて、【調査B】では、実際の文脈例について、それぞれの接続語句を省略しうるか否かを調査した。市川(1978)の【調査A】は、2文からなる各種の文脈のモデル23例について、それぞれの傍線の接続語句を省略しうるか否かを指摘させた

ものである。次の1-23は【調査A】に用いた接続表現を含む文脈例である。

【調査A】

1. ……先日はどうも失礼いたしました。() ところで、例の件は、どうなりましたか。
2. ……というような次第です。() さて、本題にはいりましょう。
3. あしたの天気はどうなるだろう。() ともあれ、今夜は早く寝るとしよう。
4. 朝早く目をさました。() そして、すぐしたくに通りにかかった。
5. 彼は頭もよい。() また、健康にも恵^{めぐ}まれている。
6. 足を開いて、両手を腰に。() つぎに、上体を前後に曲げます。
7. 私はひどく疲れていた。() そのうえ、少し熱があった。
8. 来週の水曜日に例会を開きます。() なお、今回は特に先生も出席されます。
9. 多数の生徒が風邪で欠席した。() そのため、学級は四日間閉鎖された。
10. 並木道を歩いて行った。() すると、向こうから一人の男が近づいてきた。
11. 彼はついにその難関を突破した。() かくて、彼の出願は達せられた。
12. 値段は少々高い。() しかし、種類は豊富だ。
13. 私は全力を尽くした。() それなのに、結果は思わしくなった。
14. 天気予報では晴れるはずだった。() ところが、雨になった。
15. 例会には出席する予定です。() ただし、少し遅刻するかもわかりません。
16. 100メートル14秒というところが精一杯です。() まして、12秒で走れるはずがない。
17. 兄は右の道を進んだ。() 一方、弟は左の道を選んだ。
18. 遊びに行ってもいい。() そのかわり、帰ったらすぐ勉強しなさい。
19. 思いきって言おうか。() それとも、やはり黙ってしようか。
20. この本は子どもの読み物として適切である。() すなわち、内容は子どもの生活に密着しており、ことばもやさしく、さし絵も楽しい。

21. 素晴らしいながめ（風景）だ。（ ） とりわけ、夕日のさしている林と丘は、まるで絵のようだ。
22. この文章は、しくみが粗雑なうえに、用語も不適切だ。（ ） 要するに、悪文である。
23. 私は知っていた。（ ） なぜなら、わたしはそれを前に本で読んだことがあった。

次の(一)(二)は、【調査 B】に用いた段落の例である。

【調査 B】

- (一) いまから三千万年たらずまえの時代に、地球上の気候が、前よりも著しく乾いてきて、いままで馬の住みかであった森林が乏しくなり、草原がしだいに広がった。(1) こうして ()、森林に住む馬の中から、草原でくらす馬が現れてきた。(2) もつとも ()、草原の馬が現れるとともに森林の馬が減びてしまった、というわけではない。そののち長く、両方の馬は、合い並んで生活していた。(3) しかし ()、草原の馬では、この新しい住み場所での生活に都合のいいように、体にいろいろ変化が生まれ続けたのたいて、森林の馬では、体の変化が著しくすくない。(4) やがて ()、氷河の時代に、森林の馬の仲間は、滅び去り、地球上から姿を消してしまった。たぶん、この仲間が住んでいた森林が、寒さや、空気のかわきで枯れたときに、その森林と運命をともにしたのであろう。(5) ところで ()、草原の馬は、生活のどういう変化のために、体にどんな変化が起こったのであろうか。まず食物から考えると、森林の若草や下草は割合柔らかいが、草原の草は、それに比べると、いっばんに硬い。(6) そのために ()、草原の馬の歯が、だんだんに変化した。(7) さらに ()、早く敵を発見するための必要から、背が高く、首が長くなっていた。
- (二) 犬は、主人が新しい家に引越したときでも、主人が傍にいさえすれば、安心して新しい家に住もうとします。(8) ところが ()、猫は、主人の引越した新しい家にはなかなかなじもうとはしません。おり(機会)があればもとの家に帰ろうとします。このようなことから、犬はよい動物で、猫は悪い動物だと考える人もあるようですが、そう考えるのは、人間の身勝手な態度で、猫のためにたいへんきのどくです。(9) つまり ()、このような違いは、それぞれがもともと持っていた性質なので、人間の側からだけ見て、よいとか悪いとかいうことはできません。犬は牛肉を喜んで食べますが、猫は牛肉を好まないように見えます。動物たちが、好きな食物と、きれいな食物とを選び分けるのは、おもに匂いを嗅いで決めます。(10) だから ()、このような犬と猫との違いは、好

みの匂いが違っているのだということを表しています。(11) そうして ()、このような好みは、野生のものが飼いなさらされても、そう変わらないように見えます。

(市川 1976 : 72-76)

以上の【調査 A・B】の結果から、市川(1978 : 77)は「接続語句¹⁾を省略しうるか否かという判断には、どうしても主観的要素がともなう。しかし、多数の被調査者の見解を総合すれば、かなり客観的な傾向をうかがうことができるはずである」と述べている。さらに省略率の高い接続語句と省略率の低い接続語句について、市川(1978 : 78)は「接続語句には、補助的用法のものもあれば、必須的用法のものもあるということである」と指摘している。用法上の補助的接続語句と必須的接続語句の関係について市川(1978 : 79)は「接続語句は、その用法として、補助の場合と必須的な場合とが区別され、接続語句によって、そのどちらの傾向が強いかが一応指摘できるが、しかし、それは文脈によってかなり浮動し、必須的なものが補助的なものに、また、補助的なものが必須的なものに転化するという場合がある」と述べている。

文章論の観点から日本語における接続表現の省略と用法を明らかにするため、佐久間(1992)は市川(1978)のA・B二種の調査を使い、72名の大学生を対象に調査を実施した。同じ接続の言葉の省略に関する研究だが、市川(1978)との大きな違いは市川(1978)の「接続語句」の代わりに佐久間(1992)は「接続表現」という用語を用いている。接続表現の定義について、佐久間(1992 : 63)は「二つの言語単位の間中に位置して、前後の表現の論理的・意味的關係を結合する機能を担う言語形式である。品詞論における接続詞・接続助詞、構文論における接続語、文章論における接続語句は、それぞれの対象領域での種々の規模の接続機能を担う表現を扱うものであるが、本稿で取り上げる接続表現は、最大の言語単位である文章・談話の内部における文脈の様相を示すものとして位置づける」と述べている。さらに文連接における接続表現の省略に関して、佐久間(1992 : 63)は文章・談話の中で2文が連続する形態を接続型・省略型・連鎖型の3種類の連文の型に分け、省略型は「前後の文脈から適当な接続表現を想定して、補うことによって接続型に準ずる文の連接関係の分類が可能になる」と指摘している。佐久間(1992)の調査は全般的に市川(1978)とほぼ一致した結果を得ている。さらに、佐久間(1992)は市川(1978 : 77)で示されている「多数の被調査者の見解を総合すれば、かなり客観的な傾向をうかがうことができるはずである」という考えに基づき、市川(1978)と佐久間(1992)の両調査を総合し、より客観的接続表現の省略のデータ²⁾を示している。筆者はこのデータを筆者による今回の中国人学習者の調査結果と対照するための日本語母語話者のデータとして利用することにした。このデータの詳細は本稿の表1と表2の日本語母語話者の欄に挙げられている。

以上、本稿と深い関係を持つ市川(1987)、佐久間(1992)の両研究について簡単に述べてきた。接続表現の省略問題を取り上げているものに伊藤・阿部(1991)、馬場(2006)などの研究もある。伊藤・阿部(1991)は「接続表現の機能と必要性」を明らかにするため、認知心理学的見地から実

験的手法に基づく分析と考察を行った。結果としては市川(1978)とほぼ同じ結果を示しているが、頁数の都合でここでは割愛する。

3 調査概要

市川(1978)、佐久間(1992)の調査で明らかにされている日本語母語話者のデータと比較するため、本稿は市川(1978)、佐久間(1992)の両調査で使われた A・B 二種の調査(本稿 2 頁)をそのまま利用した。日本語学習者に対する調査は予備調査と本調査に分けて行った。予備調査は 2010 年 5 月 30 日に新潟大学の留学生 10 人を対象に実施した。予備調査を通して、25 分の適当な【調査 A・B】の回答所要時間は計算でき、また難しい日本語表現の影響で、各問の文脈の理解に調査対象にとって支障がないか否かを確認し、特に難しい単語には注釈を加えた。本調査は 6 月 20 日中国黒竜江大学日本語学部 3 年生の 69 人を対象に実施した。調査対象は全員 3 年間日本語を専攻し、中級レベルの日本語学習者である。回答時間は 25 分に設定し、調査開始前に「文脈を良く理解した上で、文の続き方が分からなくなる限度内で、各問にある接続表現を省略してもよいか否かを判断してください」と調査協力者に伝えた。

4 調査結果

本節では集計によって明らかになった中国人日本語学習者の調査結果を見てみよう。調査は A・B 二種があるため、それぞれ【調査 A】と【調査 B】に分けて調査結果を見て行く。さらに佐久間(1992)における日本語母語話者のデータとの異同点も検討する。

4-1 【調査 A】

先行研究の紹介において述べたように【調査 A】は、2 文からなる各種の文脈モデル 23 例について、それぞれ接続表現を省略しうるか否かを指摘させたものである。その調査結果は表 1 の通りである(次の頁)。調査の結果を細かく記述するため、表 1 は佐久間(1992)で示されている日本語母語話者(佐久間 1992 によって示されている市川 1978 と佐久間 1992 の総合した結果)と筆者による中国人日本語学習の調査結果を接続表現の接続型別に分け、さらに個々の接続型別における具体的接続表現を記したものである。

まず接続型別に今回の調査結果を見よう。これまで接続表現の類型に関する提案は少なくない。その中、市川(1978)は文と文の前後の意味関係によって接続表現を「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「転換型」「同列型」「補足型」の 7 種類に類別している。今回は市川(1978)の A・B 二種類の調査を利用したため、市川(1978)の接続表現に関する分類法に従うことにする。

表 1. 【調査 A】 連文における接続の省略

番号	接続 型別	接続表現	日本語母語話者 (JP)			中国人日本語学習 (CN)		
			人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率	人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率
9	順接	そのため※	30	<u>22%</u>	48%	21	<u>30%</u>	51%
10		すると	80	58%		40	58%	
11		かくて	89	64%		38	55%	
12	逆接	しかし※	13	9%	11% ▲	22	32%	29% ▲
13		それなのに	25	<u>18%</u>		27	39%	
14		ところが	7	5%		12	<u>17%</u>	
4	添加	そして	87	63%	61%	55	80%	65%
5		また	135	97%		53	77%	
6		つぎに	86	62%		41	59%	
7		そのうえ	22	<u>16%</u>		30	<u>43%</u>	
16	対比	まして	108	78%	70%	47	68%	63%
17		いっぽう	136	98%		56	81%	
18		そのかわり	21	<u>15%</u>		41	59%	
19		それとも	122	88%		31	<u>45%</u>	
1	転換	ところで※	69	50%	31%	19	28%	25%
2		さて	51	37%		18	26%	
3		ともあれ	9	<u>6%</u>		15	22%	
20	同列	すなわち	120	86%	66%	51	74%	65%
21		通りわけ	59	<u>42%</u>		43	62%	
22		ようするに	96	69%		40	<u>58%</u>	
8	補足	なお	124	<u>89%</u>	60% ▲	48	70%	50% ▲
15		ただし	61	44%		20	<u>29%</u>	
23		なぜなら	65	47%		36	52%	

【調査 A】において各接続型の平均省略率³⁾は(以降平均省略率と称する)、日本語母語話者と中国人日本語学習者とともに、「逆接型」(JP : 11%, CN : 29%)と「転換型」(JP : 31%, CN : 25%)が比較的 low (表 1 の下線を引いた部分)、日本語母語話者と中国人日本語学習者にとって省略しにくい用法だと考えられる。それに対して、省略率が高い型から順に「対比型」(JP : 70%, CN : 63%)、「同列型」(JP : 66%, CN : 65%)、「添加型」(JP : 61%, CN : 65%)「補足型」(JP : 60%, CN : 50%)、

「順接型」(JP : 48%, CN : 51%)となっている。これらの型に対応する接続表現は省略されやすいと考えられる。以上、日本語母語話者と中国人日本語学習者の相同点を見てきたが、次は両者の相違点を見てみよう。

相違点に関しては、接続型の平均省略率から「逆接型」(JP : 11%, CN : 29%)と補足型(JP : 60%, CN : 50%)の 2 つは日本語母語話者と中国人日本語学習者の間における平均省略率の差が 10%以上であるため、やや違いが見られている。「逆接型」は中国人日本語学習者の平均省略率が高く、「補足型」は日本語母語話者の平均省略率が高い(▲印の付いた所)。他の 5 つの接続型においては両者の間に大きな違いが見られなかった。

次に、個々の接続表現の省略率⁴⁾を見てみよう。両者の相違点から言えば表 1 のように、日本語母語話者の個々の接続類型の中に、1 例ぐらいつつ、他の接続表現と異なる省略率を示している。(____線を付したような接続表現)、その大部分は「ソ系」の指示表現を含むものである(そのため、それなのに、そのうえ、そのかわり)。一方、中国人日本語学習者も個々の接続類型の中に、1 例ぐらいつつ、他の接続表現と異なる省略率を示しているが(____線を付した所)、日本人母語話者のように大部分は「ソ系」の指示表現を含むものではなかった。

さらに、日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違をはっきりと示すため、表 1 の JP と CN 接続表現の省略率を取り出した。両者の省略率の差は次の表 2 の通りである。表 2 から分かるように、【調査 A】のデータ I と II の各 23 個の接続表現の内、10%以上差のあるものは 18 個である。その内 20%以上差があるのは 8 個である。この 8 個の接続表現の内訳を見ると、半分はソ系の指示表現(▲を付したもの)を含むものである。

表 2. 接続表現別の省略率に関する集計

NO	接続表現	JP の省略率	CN の省略率	JP と CN の差
1	その代わり▲	15%	59%	44
2	それとも ▲	88%	45%	43
3	その上 ▲	16%	43%	27
4	しかし	9%	32%	23
5	ところで	50%	28%	22
6	それなのに▲	18%	39%	21
7	また	97%	77%	20
8	通りわけ	42%	62%	20
9	なお	89%	70%	19
10	一方	98%	81%	17
11	そして	63%	80%	17

12	ともあれ	6%	22%	16
13	ただし	44%	29%	15
14	ところが	5%	17%	12
15	すなわち	86%	74%	12
16	ようするに	69%	58%	11
17	さて	37%	26%	11
18	まして	78%	68%	10
19	かくて	64%	55%	9
20	そのため	22%	30%	8
21	なぜなら	47%	52%	5
22	次に	62%	59%	3
23	すると	58%	58%	0

4-2 【調査 B】の調査結果

【調査 B】⁹⁾において、日本語母語話者と中国人日本語母語話者の省略率に乖離が見られた。表3のように「順接型」(JP:37%, CN:35%)と「補足型」(JP:50%, CN:54%)は両者がほぼ同じ省

表3. 【調査 B】 段落における接続表現の省略

番号	接続	接続表現	日本語母語話者(JP)			中国人日本語学習者(CN)		
			人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率	人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率
1	順接	こうして	61	49%	37%	28	41%	35%
6		そのため※	12	10%		18	26%	
10		だから	65	52%		26	38%	
3	逆接	しかし	54	43%	52%	23	33%	26%
8		ところが※	75	60%		13	19%	
7	添加	さらに	62	50%	71%	35	51%	61%
11		そうして	115	92%		48	70%	
4	転換	やがて	71	57%	59%	27	39%	39%
5		ところで※	74	60%		26	38%	
9	同列	つまり	112	90%	90%	45	65%	65%
2	補足	もともと	63	50%	50%	37	62%	54%

略率を示しているが、「逆接型」（JP:52%, CN:26%）と「添加型」（JP:71%, CN:61%）、「転換型」（JP:59%, CN:39%）、「同列型」（JP:90%, CN:65%）の4つは学習者と母語話者の間に省略率の差が見られた。しかも、この4つのタイプのいずれにおいても中国人日本語学習者の省略率が日本語母語話者より低い傾向が見られた。日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違を比較するため、表2のJPとCN接続表現の省略率を取り出し、両者の省略率の差は次の表4の通りである。表4から分かるように、11例の接続表現の内、日本語母語話者と日本語学習者の間に10以上の差があるのは7例である。全体の63.6%を占めている。つまり日本語母語話者と日本語学習者の段落における接続表現の省略に差がある。一方、6番の「そのため」を除く、日本語母語話者の省略率は全部日本語学習者より高い、つまり段落や文章のようなテキストで日本語母語話者は日本語学習者と比べ、多くの接続表現を省略する傾向がある。興味深いことに、この結果は範(2010)で見た日本語学習者の作文における接続表現の量が日本語母語話者より多いという現象と符合している。

表4. 接続表現別の省略率における集計

NO	接続表現	JPの省略率	CNの省略率	JPとCNの差
1	ところが	60%	19%	41
2	つまり	90%	65%	25
3	そうして	92%	70%	22
4	ところで	60%	38%	22
5	やがて	57%	39%	18
6	そのため	10%▲	26%	16
7	だから	52%	38%	14
8	しかし	43%	33%	10
9	こうして	49%	41%	8
10	もともと	50%	54%	4
11	さらに	50%	51%	1

以上、今回A、B二種類の調査の結果を佐久間(1992)のデータと対照しながら見てきた。表4は、以上の結果に基づき日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の省略をまとめたものである。両者のそれぞれの接続表現の省略における特徴に注目したい。

5 考察

日本語母語話者(JP)と中国人日本語学習者(CN)は【調査A】と【調査B】における省略率の差に相違点が見られた。その差は表5のようである。省略率の差の算出法としては、各接続型において【調査A】の省略率から【調査B】の省略率を引いて得た数値である。例えば、日本語学習者の場合、順接型の両調査の省略率の差は「【調査A】51%－調査B36%=16」である。それに対して、日本語母語話者の場合は、順接型における両調査の省略率の差は「【調査A】48%－調査B37%=11」である。数値はマイナスの場合は【調査B】の省略率が高いということである。また、日本語母語話者と日本語学習者の両調査における差の違いを見るため、合計は接続型の差の数値の絶対値を取って合計した結果である。

表5. JPとCNの調査A,Bにおける省略率の差

対象	調査	順接	逆接	添加	転換	同列	補足	対比	合計
JP	A	48%	11%	60%	31%	66%	60%	70%	
	B	37%	52%	71%	59%	90%	50%	/	
	差	11	-41	-11	-28	-24	10	/	125
CN	A	51%	29%	65%	25%	65%	50%	63%	
	B	35%	26%	61%	39%	65%	54%	/	
	差	16	3	4	-14	0	-4	/	41

表5から分かるように、日本語学習者における【調査A】と【調査B】の間の差は41であるのに対して、日本語母語話者の差は125で、日本語学習者を遥かに上回っている。つまり、日本語母語話者にとって、接続表現が省略できるか否かは数文でできた文脈(調査B)かただ2文の連文でできた文脈(調査A)によって大きく左右されている。

さらに、表5における日本語母語話者と中国人日本語学習者の各接続の省略率から同じ傾向が見られる。日本語母語話者は、順接型(A:48%;B:37%)と補足型(A:60%;B:50%)を除いて、【調査B】における省略率は【調査A】における省略率より高い。つまり、【調査B】のような数文でできた文脈がある場合、接続表現の省略率が高くなる傾向である。これは、数文でできた大きな文脈において、文と文の関係は2文の連文でできた小さな文脈より把握しやすくなると判断されるため、接続表現の省略率は高くなると考えられる。一方、学習者における【調査A】と【調査B】の間の差は小さい。さらに転換型(A:25%;B:39%)と補足型(A:50%;B:54%)以外、【調査B】の省略率は【調査A】の省略率よりやや低い。このことは、学習者が自分の観点をできるだけ分かりやすく表明するためのストラテジーとして接続表現を利用している

という事実を示している。もう一方、今回の【調査 A、B】に「そのため」「しかし」「ところで」のような共通の項目がある。日本語母語話者は両調査にわたって、「そのため」(22%→10%)のような「ソ系」指示表現を含む接続表現を除く、「しかし」(9%→43%)、「ところで」(50%→60%)などは調査 A から調査 B にかけて省略率が高くなっている。それに対し、中国人日本語学習者は特に省略率の目立った上昇が見られなかった。以上の考察から多数の文でできた文章や段落のようなテキスト単位において、日本語母語話者は文と文の並べ方に関して全文の文脈をうまく察知することができ、文章の環境により自由自在に接続表現を省いたり用いたりしている。一方、日本語学習者は段落や文章における接続表現の省略率が2文連結の場合よりもやや低くなる傾向がある。これは学習者が長めの文章を書くとき、個々の文と文の関係を明示化しようとする傾向があることを示している。範(2010)で調査した学習者の作文の接続表現の多用は、文章を書くとき、接続表現を用いて文と文の関係を明示化しようとするを明らかにしたものであったが、その調査結果の妥当性を、今回は文の接続関係の「解釈・読解」という角度を変えた調査を通じて、あらためて実証する結果となった。

各連接型内部における日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の省略率の差を比べてみよう。表6は【調査 A】の集計でばらつきが表れた。

表6. 【調査 A】に対して日本語母語話者と中国人日本語学習者の省略率の差

共通(省略率の差は10%以下)		すると、次に、なぜなら、そのため、かくて	
相 違	JP と CN の省略率の差	CN の省略率が高い	CN の省略率が低い
	10%—19%	ところが、ともあれ、そして	まして、さて、ようするに、すなわち、ただし、一方、なお、
	20%—29%	通りわけ、それなのに、しかし、その上	また、ところで
	30%以上	そのかわりに	それとも

一方、【調査 B】の表7(次頁)はかなりシンプルで11例の接続表現でただ3例(さらに、もっとも、こうして)のみが省略率の差が10%以下である。それ以外の例では日本語学習者と日本語母語話者の間に10%以上の差がつき、しかも日本語母語話者の接続表現の省略率はそれらすべてにおいて日本語学習者より上回っている。この結果はさらに多数文でできた文章において、日本語学習者の接続表現の省略率が低いことを証明した。範(2010)の調査結果と一致している。

6 まとめと今後の課題

本稿は中国人日本語学習者の接続表現の省略状況を明らかにするため、市川(1978)の【調査

表7. 【調査B】に対して日本語母語話者と中国人日本語学習者の省略率の差

共通(省略率の差は10%以下)		さらに、もっとも、こうして	
相 違	JPとCNの省略率の差	CNの省略率が低い	CNの省略率が高い
	10%—19%	しかし、だから、やがて、	そのため
	20%—29%	そうして、ところで、つまり	
	30%以上	ところが	

A・B】を利用し、中国人日本語学習者を対象に接続表現の省略状況の調査を実施した。調査で収集したデータの集計により、中国人日本語学習者の二種の【調査A・B】における接続表現の省略状況を明らかにした。接続型から見れば、【調査A】で中国人日本語学習者は逆接型と転換型の省略率が低く、「補足型」、「順接型」、「対比型」、「添加型」、「同列型」の順で省略率が高くなる。佐久間(1992)の日本語母語話者を対象とした【調査A】においても同様な傾向が見られた。さらに【調査A】の接続表現別の集計データから考えると、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の省略率の差がもっとも大きいのは「ソ系」指示表現を含むものである。例えば、順接型・添加型・対比型などいわゆる必須的用法ではなく、補助的用法に属する「そのため」「そのうえ」「そのかわり」などは、省略率が極端に低くなることはないだろうと考えられるが、中国人日本語学習者のデータには大きな変化はないものの、日本語母語話者のデータは極端に低くため、両者の間に大きな差が見られた。「ソ系」の指示表現を含むものについては指示機能の有無を検討する必要がある。一方、比較的省略率の高い逆接型の「それなのに」や対比型の「それとも」との相違についてもさらに検討する必要がある。

【調査B】の調査結果において、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな相違点が見えた。【調査A】と異なり、【調査B】は多数の文の接続でできた文章(段落)である。このような文章(段落)における接続表現の省略は日本語母語話者がかなり高い率を示している。それに対し、中国人日本語学習者は「順接型」、「逆接型」、「転換型」の省略率がかなり低かった。日本語母語話者で省略率が低かったのは「逆説型」だけだった。この現象に関して本稿は日本語学習者より日本語母語話者は段落や文章のようなテキストの文脈をうまく察知することができ、文章中の脈絡という環境に沿って自由自在に接続表現を省いたり用いたりすることができる。一方、中国人日本語学習者は段落や文章において接続表現の省略率がやや低くなる傾向がある。これは日本語学習者が文章を書くとき、日本語母語話者のような文脈把握の能力が十分できていないため、文章の論理性のほうを特に重視して文と文の関係を明示化しようとするのであると考えられる。

市川(1978)のA・B二種の調査に用いられた接続表現は膨大な接続表現の中のわずかな一部分である。今後日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の省略状況を調査するときには、さらに多くの接続表現を用いて調査する必要があると考えている。これは今後の課題にしたい。

<注>

- 1) 市川(1978)は「接続語句」という用語を用いている。「接続語句」と「接続表現」の関係は仁田・益岡(2002: 135)によると、「文章・談話における文連鎖の解明には、市川の接続語句よりさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。接続表現には、用言の連用形・節・文・連文・段落などの言語単位による接続機能を有する表現を含める」とされている。つまり、「接続表現」は文連接の機能上「接続語句」と同様なものであるが、それはただ文章・談話の研究に応じて「接続語句」の範囲が拡大されただけなのである。以上の理由で、また本稿の用語の統一性を保つため、「接続語句」の代わりに「接続表現」の用語を用いた。ただし本稿での「接続表現」は文と文をつなぐ接続表現に限定している。
- 2) 市川(1978)は65名の大学生を対象に、佐久間(1992)は74名の大学生を対象に接続表現の省略調査を実施した。「多数の被調査者の意見を総合すれば、かなり客観的傾向がうかがうことができるはずである」(市川1978)の影響を受け、佐久間(1992)はこの2調査を総合し、139名(65+74)の大学生の接続表現における省略の平均値を算出している。本稿の表1と表2の日本語母語話者のデータはこの市川(1978)と佐久間(1992)の調査の平均値である。佐久間(1992: 67)のを参照する。
- 3) 接続型別の平均省略率 = $\frac{\text{各接続型別に属する接続表現の省略率の合計値}}{\text{各接続型別に属する接続表現数}} \times 100\%$
- 4) 接続表現の省略率 = $\frac{\text{省略しても良いと答える人数}}{\text{被調査者の総人数}} \times 100\%$

省略率は高ければ高いほど、接続表現は省略されやすくなる。逆だったら、省略されにくくなる。市川(1978)の【調査B】は対比型の接続表現に関する問題はなかった。

<参考文献>

- 浅井美恵子 (2003) 「論說的文章における接続詞について－日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4、pp. 87-98
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊藤俊一・阿部純一(1991) 「接続詞の機能と必要性」『心理学研究』62-5、pp. 316-323 頁
- 黒岩浩美 (1994) 「文章の結束性について－一連関係の分析からみた学習者の問題－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9、pp. 73-87
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の文脈展開機能」『国文』77、pp. 63-74
- 田代ひとみ (2007) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、pp. 131-144
- 範 海翔 (2010) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における接続表現に関する比較研究」『言語の普遍性と個別性』11、pp. 87-105
- 仁田義雄・益岡隆志(編) (2002) 『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 馬場俊臣 (2006) 『日本語の文連接表現－指示・接続・反復』おうふう出版

主指導教員 (福田一雄教授)、副指導教員 (高田晴夫教授・朱継征教授)